

世田谷村日記

石山修武

六月十七日 日曜日

朝七時三〇分東京発、車で菅平へ、高速道路を二時間半程で菅平高原正橋さんの家着。九時間ばかりで辿り着いていた二十年程の昔が夢のようだ。コルゲートシートの鉄の家は、赤く錆びびついで予期していた以上に農家の生活をにじませていた。川合健二さんが見たら、本当に喜こんだろうに。

午後、写真家の中里さん、スタジオヴォイスの編集部と共に、軽井沢の磯崎新さんの家を訪ねる。地球を一まわりしてきた割には磯崎さんは元氣そうで、驚いた。

夕食を宮脇愛子さんと共にして、わたしは磯崎家泊。夜、磯崎さんの幾つかの構想を聞く。全てリアルで面白かった。

六月十八日

朝から森をぶるわせるようなセミしぐれ。音は感覚を直撃するのがよくわかる。テラスで磯崎夫妻と朝食をいただき、軽井沢駅へ。愛子さんの「うつろい」はこの山荘のモノが実二自然で、ステンレスワイヤーに緑や空の光が写り込む様は、その細部のゆらめきが深く圧巻である。

午後一時過、世田谷村に帰る。

三時、小池一子さん来宅。学生十名ほどと一緒に。未完の家を案内する。まだ工事中で時期早尚なのだが、小池さんじゃあ断われない。今の世田谷村は屋上が一番面白くて快適だ。

夕方、大学へ、学科将来構想についての委員会。深夜、世田谷村の屋上に上る。日に日にさやえんどうの芽がのびているのに驚きかつ頭を抱え込んでしまう。土の問題が片付かぬからだ。土量が明らかに不足しているのに種をまいてしまったのだが、種まきの時期はすでに遅きに失している。明朝、土に関して最終指示をして、野菜に関しての大方のアイデアをまとめなくてはならない。